

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：33605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03218

研究課題名（和文）デジタル時代に求められる映像人類学 - 新たな映像民族誌の創造に向けて

研究課題名（英文）Visual Anthropology in Digital Media: An Practice for New Dimension of Visual Ethnography

研究代表者

村尾 静二（Murao, Seiji）

清泉女学院大学・人間学部・講師

研究者番号：90452052

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化人類学において、デジタル時代における映像人類学の現状と可能性を調査し、明らかにすることを目的としている。フィールドワークと民族誌の執筆を学問的アイデンティティとする文化人類学にとって、豊かな視聴覚情報を扱うことができる映像民族誌（visual ethnography）は重要な研究課題となっている。本研究は、映像民族誌の研究を先導する西欧の研究機関において実地調査を行い、また、研究者みずから映像民族誌を創造することにより、映像民族誌の創り方、それを研究に活用する方法論を広く考察するものであり、我が国の映像人類学、文化人類学の発展に資するものとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化人類学に映像民族誌を活用すること、それは映像の特性を理解したうえで、人間の視覚では知覚することが難しい現象を、持続する時空間のなかに音情報とともに総合的に記録・分析することである。それにより、我々は研究対象について多角的に考察し、新たな理解を得、仮説さえ導くことが可能となる。このように、映像民族誌は、文化人類学の基本理念である人間の総合的な理解に貢献するものとして大きな潜在力を有する。本研究課題は、映像のデジタル化が文化人類学に与えてきたインパクトを含め、多くの研究者が関心を寄せながら未開拓な研究領域であった映像民族誌を実践的に研究している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate and clarify the current status and possibilities of visual anthropology in the digital age in cultural anthropology. For cultural anthropology whose fieldwork and ethnographic writing are the academic identities, visual ethnography that can handle rich audiovisual information is an important research subject. In this research, I conduct a survey at Western European research institutes that leads the study of visual ethnography, and I also make visual ethnography by myself, which will foster the discussion on visual ethnography, and contributes to the development of visual anthropology and cultural anthropology in Japan.

研究分野：映像人類学

キーワード：映像人類学 文化人類学 メディア 芸能 芸術 インドネシア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1．研究開始当初の背景

現在、映像メディアはデジタル化されるに至った。映像メディアがアナログからデジタルへと移行する大きな契機となったのは、2012年の地上波テレビのアナログ放送終了にともなうデジタルへの完全移行である。音響メディアをめぐっては、それ以前からすでにデジタル化が進められてきたが、映像メディアに関しては、今世紀に入ってからアナログとデジタルが混在し、いわゆる「移行期」が続いていた。文化人類学に関していえば、当時もフィールドワークに映像機器を持参することは、すでに一般化していた。しかし、その多くは静止画を記録するデジタル・カメラであり、動画の記録を目的とするデジタル・ビデオカメラを用いた調査は、その頃から徐々に学生や研究者のあいだに浸透していった。しかし、動画を撮影しても、動画を編集して作品に仕上げるには高性能なパソコンが必要であり、そこまでして作品が完成される事例はまだ少数であった。

このような状況は、2012年のデジタル化を契機として変わっていく。安価で操作が容易でありながら高性能かつ小型で携行性に優れたデジタル・ビデオカメラが次々に販売され、高性能なパソコンと映像編集用ソフトウェアに関しても、低価格化と操作性の簡素化が進められていった。そして、それ以上に著しい技術開発が進められたのがスマートフォンである。スマートフォンの通信機能を使えば撮影した映像をその場で調査地の人々とシェアすることが可能であることから、広義のコミュニケーション・ツールとしてフィールドワークに浸透していった。このように、デジタル化以降、文化人類学のフィールドワークには、デジタル・ビデオ、デジタル・カメラ、デジタル・オーディオ・レコーダー、スマートフォン、ノートパソコン（映像編集、映像データ保存用）など様々なデジタル機器が調査目的に応じて持ち込まれるようになった。また、デジタルデータはアナログデータに比べると、取り扱いが格段に容易であり、静止画、動画、音響、それぞれのデータを自由に組み合わせることで編集し、そこから新たな現実を創ることさえ可能となった。

このような状況を背景として、日本の文化人類学においても映像を積極的に活用して多くの研究が行われるようになってきた。フィールドワークと民族誌の執筆を学問的アイデンティティとする文化人類学にとって、豊富な視聴覚情報を併せ持つデジタル映像の扱い方（方法論から倫理的課題まで）について共通の理解と認識を築くことは、映像人類学のみならず、文化人類学において重要な研究課題となっている。

2．研究の目的

本研究は、文化人類学において、デジタル時代における映像人類学の現状と可能性を調査し、明らかにすることを目的としている。フィールドワークと民族誌の執筆を学問的アイデンティティとする文化人類学にとって、豊かな視聴覚情報を扱うことができる映像民族誌（visual ethnography）について多角的に考察することは重要な研究課題となっている。本研究は、映像民族誌の研究を先導する西欧の研究機関において実地調査を行い、また、研究者みずから映像民族誌を創造することにより、映像民族誌の創り方、それを研究に活用する方法論について広く考察するものであり、我が国の映像人類学、文化人類学の発展に資するものとなっている。

3．研究の方法

（1）海外の研究機関における調査

西欧の映像人類学研究に積極的に取り組む研究機関を訪問し、資料収集と研究成果の調査を行った。同時に、本研究はインドネシアにおいてフィールドワークを通して映像民族誌を制作することを中心的な活動にしていることから、インドネシア文化に関して貴重な博物学資料や研究蓄積を有する研究機関に関しても訪問し、調査を行った。

熱帯博物館（オランダ、アムステルダム）では、インドネシアの文化に関する民族資料の調査と撮影を行った。本博物館は、インドネシアの民族資料に関して世界有数のコレクションを所蔵していることで知られている（2016年度に実施）。国立民族学博物館（オランダ、ライデン）でも、インドネシアの文化に関する民族資料の調査と撮影を行った。本博物館もまたインドネシアの文化に関しては豊富な民族資料を所蔵している。ラウテンシュトラウフ・ヨースト文化博物館（ドイツ、ケルン）では、博物館展示における映像資料の活用方法について調査を行った。本博物館は民族文化の展示に映像を積極的に活用してきたことで知られている。また、インドネシア文化に関しても貴重な資料を展示していることから、調査と撮影を行った。国立民族学博物館（ポルトガル、リスボン）では、インドネシアの民族資料に関する調査と撮影を行った。本博物館はインドネシアの影絵人形芝居ワヤン・クリのコレクションを有することで知られている。また、民族文化を映像を用いていかに創造的に表象するのかという問題は、映像民族誌の問題であると同時に、近年、現代アートの領域においても様々に試行され、大きな潮流となっている。そのような理由から、民族表象をテーマにした優れた映像作品がまとめて上映される世界規模のアート・イベント、ヴェネチア・ビエンナーレ（イタリア、ヴェネチア）

とドクメンタ（カッセル、ドイツ）に研究協力者の伊藤敏治先生（東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授）と共に参加した。民族や文化をいかに表現するかは現代アートにおいても重要なテーマとなっており、そこでの映像の役割、その多彩な表現、政治性、倫理等について調査を行った。（以上、2017 年度に実施）。インドネシア国内においては、新設された国立博物館新館では、民族資料の調査と撮影を行った。新国立図書館では、本研究の成果を論文にまとめる際に必要となる文献の調査と収集を行った。ナショナル・ギャラリーでは、インドネシアのナショナル・アイデンティティが芸術を通していかに表象されてきたのかについて調査した。ワヤン博物館では、ジャワ島とバリ島を中心に分布する影絵人形芝居ワヤン・クリの民族資料をその歴史や文化的背景も含めて調査した。インドネシアで最初の現代アートを専門とするミュージアムとして開館された群島美術館 MACAN では、インドネシアにおいて現代アートは伝統文化をいかに脱構築するなかで新たな芸術表現領域を創造しようとしているのかについて調査した（以上、ジャカルタ）。そして、バリ州博物館では、宗教儀礼と伝統芸能を中心に、バリの人々の生活世界について民族資料の調査と撮影を行った。仮面・影絵人形博物館では、民族資料の調査と撮影を行った（以上、バリ）（以上、2018 年度に実施）。

（２）インドネシアでのフィールドワーク、映像民族誌の制作

映像民族誌の研究は、フィールドワークに基づく映像民族誌の制作と同時に進めるのが基本である。本研究においても、映像民族誌の制作は研究成果に直結する重要な研究活動と位置付けている。

筆者はインドネシアの民族文化を研究する文化人類学者、映像人類学者である。現在はバリを代表する伝統芸能である影絵人形芝居ワヤン・クリについて、映像人類学的手法を用いて研究を進めている。高齢の名人を対象に、宗教儀礼における上演、息子や孫への技の伝承、影絵人形作り、地域社会における人間関係など、日常の生活世界そのものを対象として調査と研究を進めた。本作品に関しては、撮影は完了しており、これから編集作業を経て完成となる。また、本作品とは別に、新たに、仮面劇の演じ手であると同時に仮面作り職人でもある男性を対象に、バリの宗教文化における仮面の役割を考察する映像民族誌の制作を進めている。本作品に関しても、制作は順調に進んでおり、今後も継続的に調査と研究を進めていく。

両作品を制作するに際して、共有の視点を意識するなかで、調査対象者、ご家族、調査地の人々と研究内容、調査事項、映像民族誌の内容、作品制作のプロセス、制作における倫理、完成作品の権利等について、事前に話し合った。また、撮影を進める際には、撮影内容の妥当性について適宜、両者のあいだで話し合い、撮影後であっても疑問が生じた場合には、映像内容を共に確認しながら、話し合いの機会を持った。このように、臨機応変に両者がコミュニケーションをとりながら制作を進めることができるのは、デジタル・メディアのメリットである。一般的なフィールドワークでは、文化人類学者はインフォーマント（現地の情報提供者）と共に行動し、インフォーマントから多くのことを学ぶ。それに比べると、映像人類学調査の場合、文化人類学者は自分の関心に基づいて対象にカメラを向け、映像を記録することが多い。しかし、映像に記録されたものをどこまで理解しているかはまた別の問題として残る。文化人類学者と現地の人々が共に関わり、映像を確認しながら文化人類学調査を進めることにより、この問題を大きく減少され、その背後には、デジタル技術が大きく関与している。

なお、これらの映像作品には、バリの芸能や美術など芸術的要素が多く含まれるため、バリの美術に造詣が深い研究協力者の伊藤敏治先生から適宜ご助言をいただいた。

４．研究成果

フィールドワークを通して映像民族誌をいかに制作するのか、その際に、デジタルの特性を認識するなかで文化人類学者と研究対象者・現地の人々はいかにコミュニケーションをとり、調査・制作を進めて行くことができるのかについて、多くの経験と知見を得ることができた。フィールドワークでは、デジタル・カメラ、デジタル・ビデオ、デジタル・オーディオ・レコーダー、スマートフォン、映像編集用ノートパソコンを適宜活用するなかで、新たに映像民族誌を２作品制作することになった。

インドネシア、バリの宗教儀礼と芸能文化のかなめとなっている影絵人形芝居ワヤン・クリを対象にした作品では、その知識と技を伝承する高齢の名人の生活世界を様々な点から調査・記録した。名人が得意とするマハバラタ物語の上演、影絵人形を素材から手作りする各過程、影絵人形の修理、上演の伴奏をする楽器演奏者との打ち合わせや人間関係、弟子への知識と技の伝承、家族・親族との人間関係、日々の農作業、健康維持のための散歩、鳥・動物の飼育、友達との会話、食事、沐浴、睡眠、団らん、何をするわけでもなく過ごされる様々な時間、そして、オーラルヒストリーに関する複数回のインタビューを含め、高齢の名人が生きる日常の生活世界を両者間で何度も打ち合わせをするなかで体系的に撮影記録した。バリの伝統芸能も大きな変容の過程にあり、さらには、その担い手となる人々が生きる日常の生活世界もまた、変容の過程にある。したがって、それを比較研究するには複数の手法でデータを収集しておくことが何より重要である。

もうひとつ、バリの宗教儀礼と芸能芸能のかなめになっているものに、仮面がある。仮面は

人間が儀礼や芸能を通して神と向き合う際に、人間みずから超自然的な存在となり、神々との交流を可能にする重要なメディアとしての機能を持つ。バリ社会ではこのような仮面の文化が宗教儀礼と伝統芸能を基盤として高度に発達しており、仮面を身につけて演じる者、仮面を彫る者は社会において重要な役割を担っていることが多い。このようなことから、バリ社会においてその両方(仮面の演じ手であるとともに作り手でもある)を担う男性を調査対象者を選び、映像民族誌の撮影を行った。調査・撮影の進め方は、先述の影絵人形芝居ワヤン・クリの場合と同様である。ちなみに、両作品の調査対象者はおたがい親類関係にあることから、本研究に関してご理解いただき、ラポールの構築についても順調に進めることができた。

これらの作品に関しては、編集作業を進めているところであり、作品完成後には調査地を再訪して調査にご協力いただいた方々、村人の皆さんと上映会を開催する予定である。そして、日本においても、適宜、学会や研究会等を通して研究成果を公表する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村尾静二	4. 巻 82巻2号
2. 論文標題 表紙写真「バリ島のワヤン・クリ」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 表紙
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村尾静二	4. 巻 第2巻
2. 論文標題 映像人類学の学術的枠組み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本映画大学紀要	6. 最初と最後の頁 37頁～50頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村尾静二
2. 発表標題 ミナンカバウ人社会とシレ - 文化人類学的考察
3. 学会等名 日本ブンチャック・シラット協会文化教養講座
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 村尾静二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 東南アジア文化事典「ミナンカバウ」の項	

1．著者名 トリン・T・ミンハ （訳者）小林富久子・矢口裕子・村尾静二	4．発行年 2016年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 411
3．書名 フレイマー・フレイムド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----